

中世の諏訪上社 上級神職「五官祝」

守矢家古文書通し紹介



手形の入った「守矢文書」も展示されている企画展「諏訪上社の五官祝」＝茅野市神長官守矢史料館

中世の諏訪上社（諏訪大社上社）の、上級神職「五官祝」を取り上げた企画展「諏訪上社の五官祝」が茅野市神長官守矢史料館で開かれている。五官祝は上下関係がなく、同列の神職だったとみられる（同史料館）一方で、主導権争いもあったことを史料を通して紹介している。

神長官守矢史料館で企画展

（今井則幸）

展示している史料は上社の神長（のちに神長官）を務めた守矢家（同市）の古文書7点。

このうち「物忌令（1238年）」は、祝たちと五官の意味を記し、祝たちは「さまざまな災厄を祓い、聖朝安泰、天下泰平、国土豊穰の起請をする」とし、五官については仏教的な説明をしている。

上社の神事は五官祝が全てに関わり参列していたとみられる（同館）が、それぞれが

中心となって行う神事を持っていたことが「年中神事次第（1238年）」からうかがえる。

神長は、五官祝の上に立ち、生き神様とされる大祝の就任神事に携わっていたらしい。ところが大祝の就任神事をめぐって神長と称宜太夫の対立があったと「文安五年寛正七年文明十六十七年大祝職位奉授書留（1484年）」にある。

これは諏方宮法師丸（のちの諏方頼満）の大祝就任儀式の際に、称宜太夫は、これまで3代の大祝の秘儀伝授を神長が行ったが、それ以前は称宜太夫が行っていた。元に戻

【五官祝】

1871（明治4）年に神社制度が改正されるまで諏訪神社にあった5人の神職の総称。茅野市神長官守矢史料館によると、下社は「大祝、称宜太夫、権祝、擬祝、副祝。これに対し上社は「大祝が五官祝の上に立ち、五官祝は神長（のちに神長官）、称宜大夫、権祝、擬祝、副祝となる。上社は大祝が生き神様とされ、五官祝が神事や神社の経営を執り行ったと思われるという。（五官祝の読み方は現代の代表的な読み方）」